

投資モデル尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 古村健太郎・仲嶺 真

筑波大学人間系 松井 豊

Development of a Japanese version of the Investment Model Scale and an examination of its reliability and validity

Kentaro Komura and Shin Nakamine (*Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study develops a Japanese version of the Investment Model Scale (IMS-J) and examines its reliability and validity. In total, 133 undergraduates participated in a questionnaire survey concerning their current involvement within exclusive romantic relationships. Although some of the IMS-J items indicated low factor loadings, the factorial structure of the IMS-J is consistent with previous research. Each factor displays good internal consistency. In terms of their criterion referenced validity, associations were also examined between the IMS-J and between the triangular love scale, sensitivity to rejection cue, and diversity of behavior. The results indicate that IMS-J possesses associations with these respective scales as theoretically predicted. These findings suggest that the IMS-J has a certain degree of validity.

Key words: commitment, investment model, romantic relationships

本研究の目的は、Rusbult, Martz, & Agnew (1998) が作成した投資モデル尺度を邦訳し、その信頼性・妥当性を検討することにある。

現在まで、数多くの研究で、親密な関係の維持・崩壊を予測する要因が検討されてきた。その中で、関係満足度や愛情では関係の維持・崩壊を十分に予測できないことや、コミットメントが強力な予測因であることが明らかになった (Cate, Levin, & Richmond, 2002; Le, Dove, Agnew, Korn, & Mutso, 2010)。コミットメントは非常に多義的な概念であり、様々なモデルや定義が提出されている。その中でも相互依存性理論 (Kelly & Thibaut, 1978) を基盤とした投資モデル (Rusbult, 1980, 1983) は、様々

なサンプル集団に対し、多様な調査手法を用いて実証されてきた、非常に強力な理論である (Le & Agnew, 2003)。以下では、投資モデルについて概観していく。

投資モデル

相互依存性理論は、依存性 (dependence) を親密な関係の中心の特徴として捉えている。依存性とは、“個人が得られる成果がパートナーの活動によって影響される程度”と定義される (Rusbult & Van Lange, 2008)。すなわち、パートナーへの依存性が強くなるほど、関係から得られる成果や個人の重要な欲求の充足が、パートナーの活動に規定されるようになるのである。その結果、パートナーとの関係は継続されやすくなる。

相互依存性理論によれば、依存性は関係満足度の高さと代替肢の質の低さによって強められる。関係満足度 (satisfaction) は“関係においてネガティブ

1) 投資モデル尺度の邦訳作業に際し、筑波大学大学院人間総合科学研究科の小林麻衣子氏に多大なるご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

感情よりもポジティブ感情を経験する程度”と定義され、代替肢の質 (quality of alternative) は“最も利用可能な代替肢の知覚された望ましさ”と定義される (Rusbult et al., 1998)。関係満足度は、個人の重要な欲求がパートナーによって満たされることによって高くなり (VanderDrift & Agnew, 2012)、代替肢の質は個人の重要な欲求がパートナー以外の関係によって満たされることで高くなることになっている (Drigotas & Rusbult, 1992)。なお、代替肢には、パートナー以外の異性関係だけではなく、友人関係や家族関係、仕事や自分一人で行くことなどが含まれる。

投資モデルは、相互依存性理論を二つの点において拡張した。第一に、依存性を強める要因が、関係満足度と代替肢の質では不十分であるとして、投資量 (investment size) を導入した点である。投資量は“関係に付随する資源の大きさと重要さであり、その資源は関係が崩壊した場合に価値を減じたり失ったりするものである”と定義される (Rusbult et al., 1998)。投資される資源には、時間や努力、共通の友人、物質の共有、自己開示などがある (Goodfriend & Agnew, 2008)。これらの資源が関係に投資されるほど、関係を終結することのコスト (集結コスト) が大きくなり、依存性は強められる。

第二に、強められた依存性は、コミットメントとして体験されることを理論化した点である。依存性は、個人が関係をどれほど必要としているかを表す構造的状態 (structural state) を表す (Rusbult & Agnew, 2010)。具体的には、関係満足度の高まりは関係を続けたいという状態を作り出す。代替肢の質の低さは、関係を続ける以外に選択肢がないという状態を作り出す。投資量の多さは関係を続ける必要があるという状態を作り出す。個人はこれらの状態をあまり自覚しない。むしろ、依存性は、“依存している対象に作り上げた忠誠の感覚 (sense of allegiance)”であるコミットメントとして集約され、体験される (Rusbult & Agnew, 2010)。したがって、コミットメントは、関係満足度の高さ、代替肢の質の低さ、投資量の多さによって強められた依存性が集約され、主観的に体験されるものなのである。そのため、コミットメントは関係満足度、代替肢の質、投資量によってその強さが規定されることとなる (Figure 1)。実際、投資モデルについてのメタ分析を行った Le & Agnew (2003) では、コミットメントに対して、関係満足度が $\beta = .51$ 、代替肢の質が $\beta = -.22$ 、投資量が $\beta = .24$ の係数を示すことが明らかになっている。

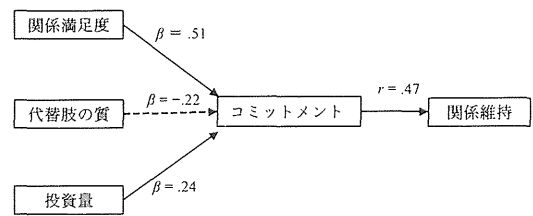


Figure 1. 投資モデルのモデル図

注) Le & Agnew (2003) より作成。図中の数値は Le & Agnew (2003) によるメタ分析の結果を示す。

コミットメントと関係の継続

投資モデルにおけるコミットメントは、“長期的志向性 (long-term orientation) と心理的愛着 (psychological attachment) を含む関係継続意思 (intent to persistence)”と定義される (Arriaga & Agnew, 2001; Rusbult et al., 1998)。すなわち、コミットメントが強い場合、二人の関係が長い間続くことを容易に思い浮かべることができ (長期的志向性)、二人が感情的につながっていると感じ (心理的愛着)、そのために関係を続けたい (関係継続意思) と感じるのである。

コミットメントの強さは、関係維持に寄与する行動の増加 (e.g., Wieselquist, Rusbult, Agnew, & Foster, 1998) や、関係を継続するか否かの意思決定に影響する。例えば、Le & Agnew (2003) のメタ分析では、コミットメントと関係継続の相関が $r = .47$ と報告されている。また、Bui, Peplau, & Hill (1996) はコミットメントが15年後に関係が継続しているかを予測することを報告した。さらに、VanderDrift, Agnew, & Wilson (2009) は、コミットメントが恋人との別れを思い浮かべることや実際に別れ行動を取ることを抑制すると報告している。

加えて、多くの研究 (e.g., Rusbult et al., 1998; Van Lange, Rusbult, Drigotas, Arriaga, Witcher, & Cox, 1997) において、関係満足度、代替肢の質、投資量と関係維持の関連が、コミットメントによって媒介されることが明らかになっている。この媒介過程は、依存性が高まるにつれてパートナーとの関係は継続されやすくなる (Rusbult & Van Lange, 2008) が、依存性はコミットメントに集約されるため、コミットメントが関係継続の主たる予測因となるという過程を表している。

投資モデル尺度

投資モデルに基づく尺度として Rusbult et al. (1998) の投資モデル尺度 (Investment Model Scale; IMS) がある。IMS は非常に多くの研究で使用されている尺度である。

IMSはコミットメントが7項目、関係満足度、代替肢の質、投資量が各5項目ずつによって構成されており、Rusbult et al., (1998)では以下の結果が得られた。まず、内的一貫性と再検査信頼性が確認された。次に、恋愛関係を対象にした縦断的研究において、関係継続カップルは関係崩壊カップルよりも、コミットメント得点、関係満足度得点、投資量得点が高く、代替肢の質得点が低かった。さらに、関係満足度、代替肢の質、投資量と関係維持の関連は、コミットメントによって媒介されていた。これらの結果から、IMSは十分な妥当性を有すると結論づけられた。

IMSについて、日本では、清水・大坊 (2007) や相馬・浦 (2009) がIMSを邦訳して、使用している。しかし、これらの研究では、尺度のバックトランスレーションが行われておらず、また、十分な妥当性の検討は行われていない。

本研究の目的

以上の議論から、本研究ではIMSの日本語版(IMS-Japanese version; 以下、IMS-Jとする)を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。手順は以下の通りである。第一に、投資モデル尺度の邦訳ならびにバックトランスレーションを行い、IMS-Jの項目を作成する。第二に、IMS-Jについて因子分析を行い、尺度の構造を確認する。第三に尺度の内的一貫性を検討する。第四に愛情、拒絶のサインへの感受性、行動の多様性との関連から妥当性を確認する。愛情については、愛情の三角理論(Sternberg, 1986)の情熱、親密性、コミットメントを取り上げる。

IMS-Jと愛情、拒絶のサインへの感受性、行動の多様性との関連についての仮説は、以下の四点である。第一に、投資モデルでは、コミットメントが関係満足度の高さ、代替肢の質の低さ、投資量の大きさによって規定されることが明らかになっている。また、Le & Agnew (2003)では、関係満足度がコミットメントの最も強力な予測因であることが報告されている。これらより以下の仮説を設定する。

仮説1. IMS-Jのコミットメントは関係満足度、投資量と正の関連を示し、代替肢の質と負の関連を示す。また、その値の大きさについては、関係満足度の方が代替肢の質や投資量よりも大きい。

第二に、コミットメントと愛情の関連について、Rusbult et al. (1998)はIMSとLove-Liking尺度(Rubin, 1970)との関連を検討し、愛情と好意のどちらもコミットメント、関係満足度、投資量と正の関連を、代替肢の質と負の関連を示すことを明らか

にしている。Love-Liking尺度の愛情と好意は、それぞれ愛情の三角理論の情熱と親密性とに対応するものである(e.g., Masuda, 2003)。したがって、情熱と親密性は、IMS-Jのコミットメントと関係満足度、投資量と正の関連を、代替肢の質と負の関連を示すと考えられる。

また、愛情の三角理論のコミットメントは、投資モデルのコミットメントとほぼ同様の構成概念を測定していると考えられる。したがって、愛情の三角理論のコミットメントはIMS-Jのコミットメントと強い関連を示し、また、関係満足度、投資量と正の関連を、代替肢の質と負の関連を示すと考えられる。

仮説2. IMS-Jのコミットメント、関係満足度、投資量は、愛情の三角理論の各要素と正の関連を示し、代替肢の質は各要素と負の関連を示す。

第三に、Rusbult et al. (1998)では、行動の多様性とコミットメント、関係満足度、投資量が正の関連を示し、代替肢の質が負の関連を示すことが報告されている。したがって、以下の仮説が設定される。

仮説3. IMS-Jのコミットメント、関係満足度、投資量は行動の多様性と正の関連を、代替肢の質は負の関連を示す。

第四に、拒絶のサインへの感受性は、関係喪失のコストが高い状況において高くなる(宮崎・向井・田端・池上, 2008)。投資量が終結コストを高めることを踏まれば、関係への投資量が多くなるほど、拒絶のサインへの感受性が高くなると予測される。したがって、以下の仮説が設定される。

仮説4. 投資量は拒絶のサインへの感受性と正の関連を示す。

方 法

調査対象者と調査方法

2012年9月から12月にかけて、東京都A大学、B大学、千葉県C大学、茨城県D大学の大学生433名を対象に、講義時間内に質問紙を配布し、回答を求めた。本研究では、現在恋人がいると回答した133名(男性44名、女性89名)を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は20.13歳(SD=1.63)、交際期間は、6ヶ月未満が40名、6ヶ月~1年が38名、1~2年が28名、2~3年が15名、3年以上が12名であった。

質問紙構成

1. フェイスシート：年齢、性別、恋人の有無、交際期間を尋ねた。

2. IMS-J: Rusbult et al. (1998) が作成した尺度を邦訳した。邦訳に際し、原著者 (Rusbult, C. E.) と第2著者 (Martz, J. M.) が逝去しているため、第3著者 (Agnew, C. R.) から許可を得た。邦訳の手続きは以下である。まず、第1著者と第2著者がIMSの邦訳を行った。その日本語訳について、英国で学位を取得した大学院生がバックトランスレーションを行った。この結果を踏まえ、著者らと英訳者との間で訳語のニュアンスについて検討し、修正を行った。その上で、心理学を専攻する大学院生2名が項目内容のチェックを行い、米国での生活歴がある大学院生1名が英語と日本語の対応のチェックを行った。以上の手続きで作成された項目案の英訳は Agnew, C. R. によって確認され、修正の指示を受けた。指示を受けた箇所について修正をした後、再度 Agnew, C. R. の確認を受け、最終版を決定した (Table 1, Table 2)。“以下の項目はあなたと〇〇さんの関係にどの程度あてはまりますか”と教示を行い、7件法 (1. 全く当てはまらない~7. 非常に当てはまる) で回答を求めた。

3. 愛情の三角理論尺度 (Triangular Love Scale; TLS) : Sternberg (1997) が作成した愛情の三角理論尺度の邦訳版 (金政・大坊, 2003) を用いた。この尺度は、情熱、親密性、コミットメントの3つの下位尺度によって構成されている。本研究では、金政 (2007) に従い、金政・大坊 (2003) で該当する因子に高い負荷量を示していた各5項目ずつを用いた。7件法 (1. 全く当てはまらない~7. 非常に当てはまる) で回答を求めた。

4. 拒絶のサインへの感受性: 宮崎他 (2008) が作成した尺度を用いた。この尺度は全6項目から構成される。宮崎他 (2008) では、一般的な友人からの拒絶のサインを扱っているが、本研究では特定他者からの拒絶のサインを測定できるように、“友人”を“〇〇さん”に変更した。7件法 (全く当てはま

らない~非常に当てはまる) で回答を求めた。

5. 行動の多様性: 清水・大坊 (2008) が作成した相互作用の多様性を測定する項目を使用した。この尺度は恋愛行動30項目について、1ヶ月の間2人きりで行ったか否かを2件法で尋ねるものである。なお、本研究では、倫理的配慮から“セックスをした”の項目を削除し、29項目について尋ねた。得点範囲は0~29点である。

結 果

IMS-J の因子分析と信頼性

IMS-J のコミットメント尺度の一次元性を確認するため、主成分分析を行った (Table 1)。その結果、いずれの項目も十分な負荷量を示しており、コミットメント尺度の一次元性が確認された。また、負荷量が負の値を示した2項目 (項目番号11と15) の得点を逆転し、 α 係数を算出したところ、 $\alpha = .88$ と十分な内的一貫性が確認された。そこで、コミットメント尺度の項目の平均値を求め、それをコミットメント得点とした。

次に、IMS-J の関係満足度、投資量、代替関係の質を測定する15項目について、平行分析を行ったところ、3因子解が適当であると推測された。そこで因子数を3に指定した重み付け最小二乗法・promax 回転の因子分析を行った (Table 2)。その結果、第1因子には関係満足度に、第2因子には代替関係の質に、第3因子には投資量に該当する項目がそれぞれ負荷していた。また、各因子の内的一貫性は関係満足度で $\alpha = .87$ 、代替関係の質で $\alpha = .70$ 、投資量で $\alpha = .71$ であった。なお、投資量の1項目 (項目番号22) の負荷量が .30 と低かった。通常であればこの項目を削除し、再度因子分析を行うべきであるが、IMS 原版を尊重し、項目の削除を行わなかった。各因子の平均値を算出し、各尺度得点とした。

Table 1
コミットメント尺度の主成分分析結果

No	項 目	負荷量	M	SD
19.	自分たちの関係を永遠に続けたい	.891	5.10	1.61
8.	私は〇〇さんとの関係を維持しようと心に決めている	.872	5.20	1.51
4.	私は、自分たちの関係をずっと続けたい	.864	5.64	1.37
21.	私は、自分たちの関係の遠い将来にまで目を向けている (例えば、今から数年後に〇〇さんといふことを想像するなど)	.767	5.08	1.60
16.	気持ちの上で、私は〇〇さんにつながっていると感じる	.733	5.12	1.39
11.	もし、近いうちに自分たちの関係が終わっても、私は全く動揺しないだろう	-.613	2.70	1.70
15.	来年までに、私は〇〇さん以外の人とデートをするだろう	-.589	3.14	1.86
		寄与率	41.5	

Table 2
関係満足度、代替肢の質、投資量の因子分析結果（重み付け最小二乗法・promax 回転）

No.	項目	F1	F2	F3	h^2	M	SD
関係満足度							
1.	私は、自分たちの関係に満足している	.887	-.166	-.055	.642	5.27	1.52
12.	自分たちの関係は、私をととも幸せにしてくれる	.873	-.180	-.070	.614	5.76	1.15
5.	自分たちの関係は、他の人たちの関係よりもずっとよいものだ	.791	-.045	-.000	.583	5.13	1.47
9.	自分たちの関係は理想に近いものだ	.704	.157	.043	.652	4.67	1.56
17.	自分たちの関係は、人と親しくしていきたいという私の気持ちを満たしてくれる	.674	.057	.138	.500	5.39	1.25
代替肢の質							
6.	自分たちの関係の代わりになるもの（例えば、他の人とのデート、友人と過ごすこと、自分一人で過ごすことなど）は魅力的だ	.004	.702	-.042	.502	4.82	1.61
20.	人と親しくしていきたいという私の気持ちは、〇〇さんとの関係以外でも簡単に満たすことができる	-.079	.601	.064	.366	4.33	1.59
2.	〇〇さん以外の、これから関わるかもしれない人たちはとても魅力的だ	.106	.544	-.217	.345	4.92	1.36
10.	もし私が〇〇さんとデートしていなかったら、私は他の魅力的な人とデートをするだろう	-.219	.503	.114	.293	3.82	1.79
13.	自分たちの関係の代わりになるもの（例えば、他の人とのデート、友人と過ごすこと、自分一人で過ごすことなど）は理想に近いものだ	.154	.475	-.072	.232	4.11	1.50
投資量							
7.	私の生活の大部分は〇〇さんと結びついていて、関係が終わるとその全てを失ってしまうだろう	-.154	-.064	.999	.848	4.76	1.79
14.	私は、自分たちの関係にのめり込んでいると感じる	.272	-.047	.461	.455	4.70	1.56
18.	私と〇〇さんの関係が終わると、友人や家族との関係がこじれてしまうだろう（例えば、〇〇さんと私の親友が友達である）	-.095	.079	.392	.115	3.08	1.90
3.	私は、関係が終わったら失ってしまうであろうものを、自分たちの関係にたくさん費やしている	.269	.128	.382	.341	3.76	1.45
22.	私の知っている人たちと比べて、私は〇〇さんとの関係に多くのことを費やしている	.264	-.156	.302	.308	4.97	1.53
寄与率		33.8	17.3	16.9			
因子間相関		F2	-.124				
		F3	.627	-.141			

他の尺度の分析

TLS、拒絶のサインへの感受性の一次元性ならびに内的一貫性を確認した。まず、TLSの下位尺度ごとに主成分分析をおこなった結果、各項目の負荷量は情熱で.75以上、親密性で.70以上、コミットメントで.76以上を示しており、各尺度の一次元性が確認された。また、 α 係数を算出した結果、情熱で $\alpha = .86$ 、親密性で $\alpha = .84$ 、コミットメントで $\alpha = .87$ と十分な内的一貫性が確認された。

拒絶のサインへの感受性について主成分分析を行った結果、負荷量の絶対値が.63以上であり、尺

度の一次元性が確認された。そこで、負荷量が負の値を示した2項目の得点を逆転し、 α 係数を算出した結果、 $\alpha = .77$ と十分な内的一貫性が確認された。

以上から、TLSの3下位尺度と拒絶のサインへの感受性尺度は一次元性と十分な内的一貫性が確認された。そこで、各尺度の平均値を算出し、各尺度得点とした。

各尺度の記述統計量

各尺度の記述統計量を Table 3に示す。各尺度得点に男女差があるかを検討するため、 t 検定を行っ

た結果、TLSのコミットメント得点は、男性の方が女性よりも有意に高かった。

コミットメントと関係満足度、代替肢の質、投資量の関連

IMS-Jのコミットメントが関係満足度や投資量と正の関連を示し、代替肢の質と負の関連を示すかを検討するため、コミットメントを目的変数、関係満足度、代替肢の質、投資量を説明変数とする重回帰分析を行った。なお、性別を統制するため、性別をダミー変数化し(男性=1, 女性=0)、重回帰分析に投入した。その結果、重相関係数は $R^2=.62$ ($F_{(3,129)}=68.83, p<.001$)であった。偏回帰係数については、IMS-Jのコミットメントに対して、関係満足度 ($\beta=.57, p<.001$)、投資量 ($\beta=.24, p<.001$) が正の関連を、代替肢の質 ($\beta=-.23, p<.001$) が負の関連を示していた。また、関係満足度からの偏回帰係数は、代替肢の質や投資量よりも大きかった。

IMSとTLS、行動の多様性、拒絶のサインへの感受性の関連

IMSとTLS、拒絶のサインへの感受性、行動の多様性の関連を検討するため、性別と交際期間を統制した偏相関係数を算出した(Table 4)。その結果、IMS-Jのコミットメントと関係満足度、投資量は、情熱、親密性、TLSのコミットメント、行動の多様性と正の関連を示していた。

一方、代替肢の質は、情熱ならびにTLSのコミットメントと負の関連を示し、親密性および行動の多様性とは関連を示さなかった。また、投資量は拒絶のサインへの感受性と正の関連を示した。

考 察

本研究の目的は、Rusbult et al. (1998) が作成したIMSの邦訳版であるIMS-Jを作成し、その妥当性と信頼性を確認することであった。

主成分分析の結果、コミットメントの一次元性が

Table 3
各尺度の記述統計量

	男性	女性	t	Cohen's d
コミットメント (IMS-J)	5.37(1.00)	5.08(1.29)	1.27	.24
関係満足度	5.39(0.93)	5.18(1.23)	1.06	.18
代替肢の質	4.27(1.05)	4.42(1.05)	0.76	.14
投資量	4.48(1.08)	4.12(1.10)	1.81	.33
情熱	4.85(1.33)	4.71(1.41)	0.57	.10
親密性	5.95(0.84)	5.66(1.02)	1.61	.30
コミットメント (TLS)	5.17(1.22)	4.47(1.33)	2.94 ***	.54
拒絶のサインへの感受性	3.75(1.28)	3.60(1.22)	0.66	.12
行動の多様性	22.82(5.29)	22.28(4.87)	0.58	.11

*** $p<.001$

Table 4
IMSとTLS、拒絶のサインへの感受性、行動の多様性の偏相関係数

	情熱	親密性	コミットメント (TLS)	拒絶のサインへの感受性	行動の多様性
コミットメント (投資モデル)	.670***	.492***	.741***	.144	.342***
関係満足度	.510***	.718***	.640***	-.019	.361***
代替肢の質	-.276**	-.023	-.290**	-.176	-.096
投資量	.576***	.400***	.711***	.443***	.439***

*** $p<.001$, ** $p<.01$

統制変数：性別、交際期間

確認された。また、関係満足度、代替肢の質、投資量について因子分析を行ったところ、それぞれに該当する項目がまとまっていた。これらの結果から、IMS-Jの因子構造が確認された。しかし、投資量の因子で、負荷量が.30と低い項目が存在した。この原因の一つとして、日本語訳の問題が考えられる。今後、項目の内容的妥当性を確認し、必要であれば項目の修正を行う必要があると考えられる。

次に、内的一貫性を確認したところ、いずれの因子においても十分な値が得られた。この結果から、IMS-Jの各因子は十分な内的一貫性を有していることが明らかになった。今後は、内的一貫性だけではなく、再検査信頼性についても検討する必要がある。

加えて、コミットメントに対して、関係満足度と投資量が正の関連を示し、代替肢の質が負の関連を示していた。また、その値の大きさはLe & Agnew (2003)の結果と同様であり、コミットメントと関係満足度の関連が、コミットメントと代替肢の質や投資量の関連よりも大きな値を示していた。したがって、仮説1は支持された。IMS-JがIMSと同様の内部構造を示したことは、IMS-Jの妥当性を示す結果と考えられる。

IMS-Jのコミットメントと関係満足度、投資量はTLSの各要素および行動の多様性と正の相関を示し、代替肢の質はTLSの情熱とコミットメント、行動の多様性と負の関連を示していた。したがって仮説2は一部が支持され、仮説3は支持された。代替肢の質とTLSの親密性が関連しなかったことは仮説に反する結果だった。親密性の項目は、“○○さんとはうまくコミュニケーションをとれている”、“私と○○さんの関係は温かいものである”など、パートナーとの関係について尋ねている。相馬・浦(2009)は、恋愛関係にある人たちが自分たちの関係を何らかの基準と比較することなく特別に価値のあるものだと判断する傾向があることを明らかにしている(相馬・浦, 2009)。この傾向をふまえれば、親密性の評価も、何らかの基準と比較されることなく絶対的に高く価値付けられている可能性がある。このような絶対的な価値付けは、パートナーとの関係とそれ以外の選択肢との具体的な比較に基づいている代替肢の質とは、概念的に独立したものとされる(相馬・浦, 2009)。そのため、本研究では代替肢の質と親密性との関連が見られなかった可能性がある。

投資量は拒絶のサインへの感受性と正の関連を示しており、仮説4は支持された。関係に多くの資源を投資することで終結コストは高まる。さらに、終

結コストの高まりは拒絶のサインへの感受性を高める。そのため、投資量と拒絶のサインへの感受性との関連を示したと考えられる。

以上から、本研究で作成したIMS-Jについて、一定の妥当性を保証する結果が得られた。今後は、以下の点を検討することで、妥当性のさらなる確認を行う必要がある。第一に予測的妥当性の検討である。投資モデルは関係維持を予測する理論である。したがって、IMS-Jが関係維持を予測できるかを検討する必要がある。また、その際には、コミットメントが様々な関係維持活動を促進することで関係の維持を促すというプロセス(cf., Rusbult & Agnew, 2010)を確認することも必要であろう。

第二に項目の内容的妥当性の検討である。本研究はバックトランスレーションを行って項目を作成した。その際、原版を尊重したために内容が不明瞭な項目があることも否めない。そのため、項目の内容的妥当性を再検討する必要がある。

また、近年、コミットメントに対する関係満足度、代替肢の質、投資量の影響は様々な要因によって媒介や調整がなされることが報告されている。例えば、Kurdek (2007)は、コミットメントに対する投資量の影響は関係満足度が低いほど強くなることを報告している。また、Foster (2008)はコミットメントと関係満足度、代替肢の質、投資量の関連が自己愛傾向によって調整されることを明らかにしている。さらに、Macher (2012)はペアデータを用いた調査を行い、自分自身の関係満足度や代替肢の質、投資量が、パートナーのコミットメントに影響を与えることを報告している。これらの研究が示すように、コミットメントと関係満足度、代替肢の質、投資量との関連を媒介したり調整したりする関係性要因や個人特性を検討していくことも必要であろう。

引用文献

- Arriaga X. B. & Agnew, C. R. (2001). Being committed: Affective, cognitive, and conative components of relation of commitment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1190-1203.
- Bui, K. V. T., Peplau, L. A., & Hill, C. T. (1996). Testing the Rusbult model of relationship commitment and stability in a 15-years study of heterosexual couples. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 1244-1257.
- Cate, R. M., Levin, C. L., & Richmond, L. S. (2002). Premarital relationship stability: A review of re-

- cent research. *Journal of Social and Personal Relationships*, **19**, 261-284.
- Drigotas, S. M., & Rusbult, C. E. (1992). Should I stay or should I go? A dependence model of breakups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 62-87.
- Foster, J. D. (2008). Incorporating personality into the investment model: Probing commitment processes across individual differences in narcissism. *Journal of Social and Personal Relationships*, **25**, 211-223.
- Goodfriend & Agnew, C. R. (2008). Sunken costs and desired plans: Examining different types of investments in close relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 1639-1652.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連. *社会心理学研究*, **22**, 274-284.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係. *感情心理学研究*, **10**, 11-24.
- Kelley, H. H., & Thibaut, J. W. (1978). *Interpersonal Relationship: A Theory of Interdependence*. New York: Wiley. (黒川正流 (監訳) (2006). 対人関係論誠信書房).
- Kurdek, L. A. (2007). Avoidance motivation and relationship commitment in heterosexual, gay male, and lesbian partners. *Personal Relationships*, **14**, 291-306.
- Le, B., & Agnew, C. R. (2003). Commitment and its theorized determinants: A meta-analysis of the investment model. *Personal Relationships*, **10**, 37-57.
- Le, B., Dove, N. L., Agnew, C. R., Korn, M. S., & Mutso, A. A. (2010). Predicting nonmarital romantic relationship dissolution: A meta-analytic synthesis. *Personal Relationships*, **17**, 377-390.
- Macher, S. (2012). Social interdependence in close relationships: The actor-partner - interdependence - investment model (API-IM). *European Journal of Social Psychology*, **43**, 84-96.
- Masuda, M. (2003). Meta-analyze of love scale: Do various love scales measure the same psychological constructs? *Japanese Psychological Research*, **45**, 25-37.
- 宮崎弦太・向井有理子・田端拓哉・池上知子 (2008). 友人関係の単一-多重送信性と拒絶のサインへの感受性. *日本社会心理学会・グループ・ダイナミックス学会合同大会発表論文集*, 158-159.
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 101-117.
- Rusbult, C. E., & Agnew, C. R. (2010). Prosocial motivation and behavior in close relationships. In *Prosocial Motives, emotions, and Behavior: The Better Angels of Our Nature*. Washington, DC: American Psychologist Association. pp.327-345.
- Rusbult, C. E., Martz, J. M., & Agnew, C. R. (1998). The investment model scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives and investment size. *Personal Relationship*, **5**, 357-391.
- Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2008). Why we need interdependence theory. *Social and Personality Psychology Compass*, **2**, 2049-2070.
- 清水裕士・大坊郁夫 (2007). 恋愛関係の相互作用構造と関係安定性の関連: カップルデータへのペアワイズ相関分析の適用. *社会心理学研究*, **22**, 295-304.
- 清水裕士・大坊郁夫 (2008). 恋愛関係における相互作用構造の研究 - 階層的データ解析における間主観性の分析 - *心理学研究*, **78**, 575-582.
- 相馬敏彦・浦光博 (2009). 親密な関係における特別観が当事者たちの協調的・非協調的志向性に及ぼす影響. *実験社会心理学研究*, **49**, 1-16.
- Sternberg, R. J. (1986). A Triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 113-135.
- Sternberg, R. J. (1997). Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, **27**, 313-335.
- Van Lange, P. A. M., Rusbult, C. E., Drigotas, S. M., Arriaga, X. B., Witcher, B. S., & Cox, C. L. (1997). Willingness to sacrifice in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1373-1395.

- VanderDrift, L., Agnew, C. R. & Wilson, J. E. (2009). Nonmarital romantic relationship commitment and leave behavior: The mediating role of dissolution consideration. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *35*, 1220-1232.
- VanderDrift, L. & Agnew, C. R. (2012). Need fulfillment and stay-leave behavior: On the diagnosticity of personal and relational needs. *Journal of Social and Personal Relationships*, *29*, 228-245.
- Wieselquist, J., Rusbult, C. E., Agnew, C. R., & Foster, C. A. (1999). Commitment, pro-relationship behavior, and trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *77*, 942-966.

(受稿 3 月 29 日 : 受理 5 月 8 日)